1.ふじいでらの村相撲 「村相撲と河内十三組」

河内では明治から昭和の中頃まで村相撲が盛んに行われていました。河内の村相撲の特色として、各村々に素人仲間の相撲部屋があり、地域ごとに相撲組合を組織していたということです。

藤井寺市は松原市・柏原市・八尾市・羽曳野市・・・などの大和川流域を中心とした相撲部屋で組織された「河内十三組」という相撲組合に属していました。

「河内十三組」は頭取（親方・現年寄り）・所属力士・世話人・取り組みを決める若者頭で構成され、給金も支払われ、給金帳には力士の階級（給金）が記されていました。給金定めの相撲になったのが、道明寺天満宮の八朔相撲といわれています。

河内十三組の興行

3 月 25 日 羽曳野能まつり、8 月 25 日 河内長野観心寺相撲、9月1日 道明寺天満宮の八朔相撲、10 月 2 日 酒屋神社相撲（松原）等各地の秋祭。その他、親方の引退相撲など年間数十回行われていました。

御幣棒

興行の様子

土俵の四隅に柱があり、東西南北の四面に「河内十三組」の天幕が垂れさがり、数百人分の桟敷が設けられました。とりくみは「わり」と言われ、1 対 1 の試合が行われる 5 人抜きの勝ち抜き戦でした。勝者には新築の棟に上げられる御幣棒が授与されました。

毎回,見物客を多く集めて興行し、庶民の娯楽として人気がありました。昭和の初期頃までは盛んに行われていましたが、時代の流れによって若者の相撲に対する興味が薄れ、その後、昭和 58 年の瓜破の相撲が最後となり自然消滅してしまいました。

河内名所図会（享和元年 1801 年）枚岡神社での村相撲

・出番待ちの力士や廻しを締める力士
・境内に作られた土俵で取り組みをしている様子
・老若男女、様々な人達が相撲を見物している様子
・女性は相撲すら見ることが許されなかったと言われていたが、この絵には女性の姿も描かれている

河内の村相撲は「見る」だけではなく、「取る」時代であり、庶民にとっては今日よりもっと身近なものとして存在していたようです。娯楽の少なかった当時の人達の楽しみの一つだったのでしょう。

（芳尾）

（参考 「今に残る村相撲」―河内十三組資料集―、平成 23 年 10 月、柏原市教育委員会;「第 23 回特別展 村相撲と河内十三組」、平成 23 年 10 月、(財)松原市文化情報振興事業団）